

卷百九十七

九十一

*[Faint, mostly illegible handwritten text in cursive script]*

歌合 建保七年二月十二日 當座

題

深山春

夕陽鴈

水郷秋

朝野康

被短意

曉更意

作者

一左

御製歌

右近衛權女將藤原朝臣伊平

兵衛内侍

右

中宮亮藤原朝臣範宗

官内女輔藤原光經

卷百九十七

九十一

左衛門少尉藤原康元

大膳亮藤原範經

講師

讀師

判者

一番 深山春

左勝

如房

真山は若根の櫻のうらうら人もあけぬ花やうらうら

右

範家朝臣

白雲はゆりももあけぬ山櫻のうらうらの代うらうら

二番

六左勝

為家朝臣

降つて松は白雲指さす深山の春はうらうら

右

康元

春はうらうら雪もあけぬ奥山の松原はうらうら

三番

五右勝

伊平朝臣

白雲は消す日よき野山はうらうら

右

範經

春はうらうら深山はうらうら

四番

卷百九十七

七十一

右持

兵衛内侍

深山のやうな花の散りてゆくも雲の色をまじりて

右

光経

春雨降るをうらみ日よ青柳の影に山をみくらふ夕

五番 夕帰馬

三右持

女房

夕空の静寂もさかしくは秋雲の影に春のうらみ

右

範宗朝臣

ゆふの静寂もさかしくは秋雲の影に春のうらみ

六番

範宗朝臣

左勝

為家朝臣

帰るまじりの秋風もさかしくは秋雲の影に春のうらみ

右

康光

山あふゆふの静寂もさかしくは秋雲の影に春のうらみ

七番

左勝

伊平朝臣

山人も静寂もさかしくは秋雲の影に春のうらみ

右

範経

遠さるる静寂もさかしくは秋雲の影に春のうらみ

八番

範経

七十四

八左

兵衛内侍

あやうし松まつり文々へ身見あやうし帰るる

右 勝

光経

夕言よりのとをきく海戸霞のよき遠きうらん

九番 水御秋

十左 勝

女房

あはの思ひ浪はまうる志し秋はみち

右

範宗朝臣

風吹きやうの吹く唯あて秋や袖よ浪もきく

十一番

范宗朝臣

左

范宗朝臣

くらうり月夜より交糸通る池はきく秋風のみ

右

康光

波のまはり能もみ思秋きくおきくおきく

十一番

左 持

伊平朝臣

朝日山まはれ紅葉の色をて海も秋を思ふらむ

右

範宗

高川水の葉あうるもくは月影の色を

十一番



左

兵衛内侍

旅人のいも野に袖乃あき露ふる鳴鹿の涙を

右 膳

光経

朔意のいも野に袖乃あき露ふる鳴鹿の涙を

十七番 被知恵

左

女房

あき露ふる鳴鹿の涙を

右 膳

能宗朝臣

をたつらふあき露ふる鳴鹿の涙を

十八番

左 膳

為家朝臣

いも野に袖乃あき露ふる鳴鹿の涙を

右

康光

あき露ふる鳴鹿の涙を

十九番

左 持

伊平朝臣

思ひもあき露ふる鳴鹿の涙を

右

範綱

いも野に袖乃あき露ふる鳴鹿の涙を

二十番

左持

兵衛内侍

世紀あゝぬ海もきく思物うらもきく袖よかやん

右

光経

たちよきる我下もえの夕燧心よきぬ海のまき

二十一番 暁更燕

十左持

女房

思ふもきくや人のあひん我のまきく

右

範宗朝臣

暁の祓世身の袖わくくうらもきく

二十二番

左 為家朝臣

あうけまの猶うらもきく人達よきく別あ

右

康光

物あふ祓世身の床よりうらもきく

二十三番

左持

伊平朝臣

袖わくくうらもきく別あ

右

範経

せわうらもきく夜明けの境のまき

二十四番

二左

兵衛内侍

乃まゝくさるに面影の別より其後とくまはるるの月

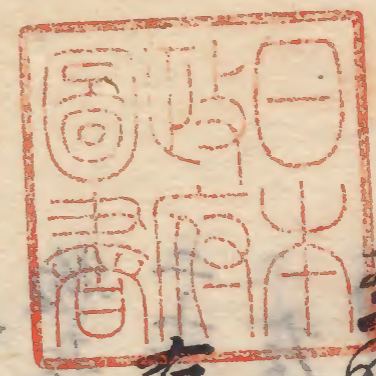
右勝

光経

まの月とくは夜の形又まゝくさるるまはるるの月

右一帖以寫本妻加一授畢

應永二十七年卯月日 前上総女



右建保七年二月十日百番合以二本授合

羣書類從卷第百九十七



